

論文内容の要約

| | |
|--|--|
| 論文名 | Effective Surveillance to Identify the Surgical Patients Carrying Methicillin-resistant <i>Staphylococcus Aureus</i> on Admission in a Pediatric Ward (小児病棟においてメチシリン耐性黄色ブドウ球菌を保菌した外科患者を検出する入院時細菌培養検査の検討) |
| 氏名 | 山本 美紀 |
| <p>【目的】 小児病棟における外科患者のうちメチシリン耐性黄色ブドウ球菌（MRSA）保菌者を効果的に同定するためには、どのような患者に入院時監視培養を行うべきか検討した。</p> <p>【対象】 2004年6月から2010年11月までに大阪市立大学医学部附属病院および関連施設の小児病棟に4日以上入院している外科患者1124人に監視培養検査を行なった。</p> <p>【方法】 入院または転院後48時間以内に細菌培養検査を行なった。MRSAの保菌率と、過去の入院歴の有無、心身障害の有無、年齢との関連を検討した。</p> <p>【結果】 患者の保菌率は7.8%であった。入院歴のない患者、1年以前に入院歴のある患者、1年以内に入院歴のある患者の保菌率は、それぞれ2.3%、3.4%、14.5%で、1年以内に入院歴のある患者の保菌率は他の2つのグループと比較して有意に高かった（$p < 0.0001$）。心身障害のある患者の保菌率（19.2%）は、心身障害のない患者の保菌率（6.1%）と比較して有意に高かった（$p < 0.0001$）。3歳未満と15歳以上の患者の保菌率（それぞれ11.7%、11.9%）は他の年齢層の患者の保菌率（3.8%）と比較して高かった（$p < 0.05$）。多変量解析で、1年以内の入院歴、心身障害、3歳未満と15歳以上の年齢層は独立した危険因子であった。</p> <p>【結論】 1年以内の入院歴、心身障害、3歳未満と15歳以上の年齢層は、入院時のMRSA保菌の危険因子である。積極的入院時細菌培養はこれらの危険因子群には行うべきである。</p> | |